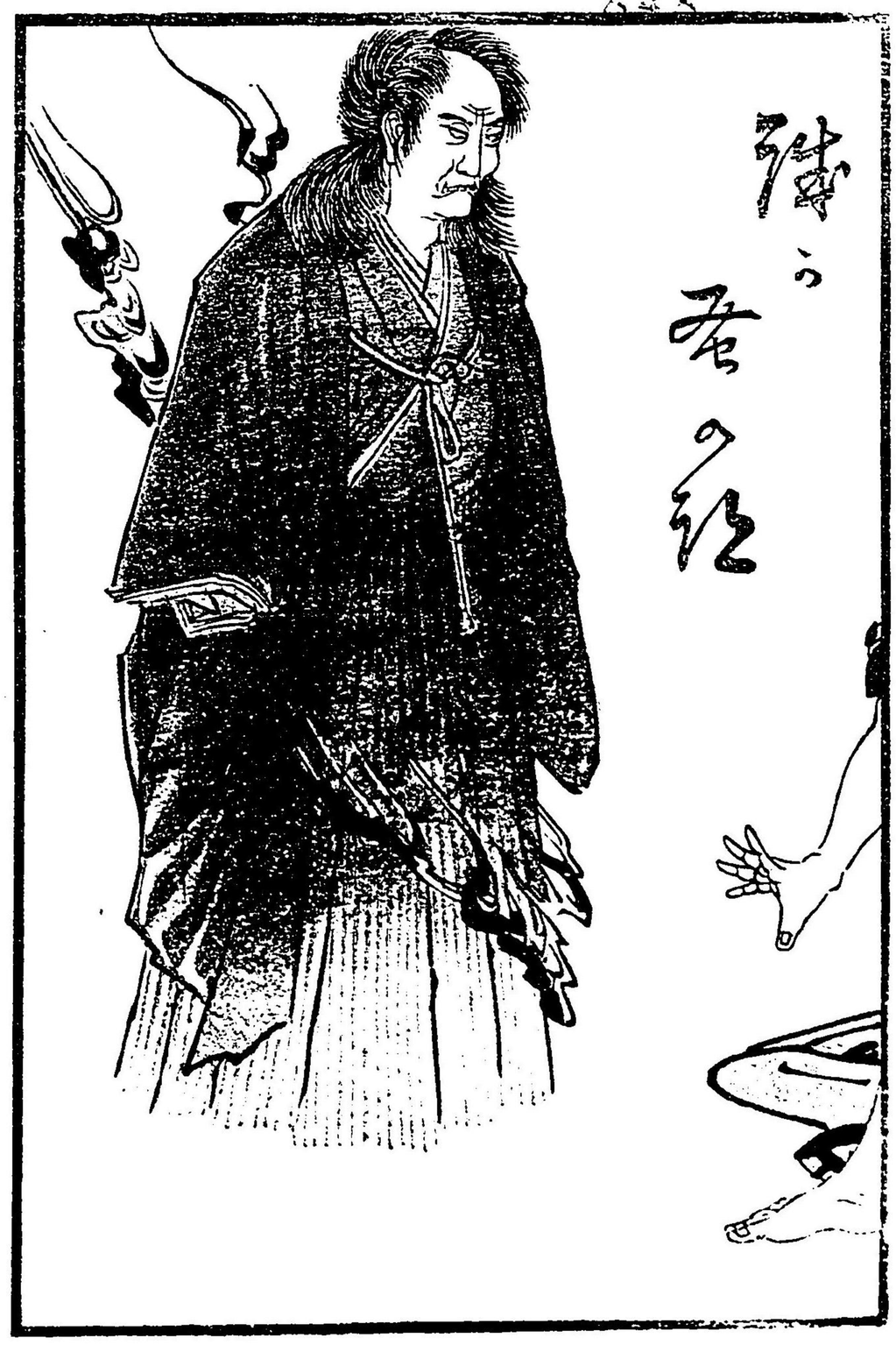
特42
848

特42：

848



序

[illegible]

近頃土佐の聞書巻ノ一

編輯　長尾吉之助

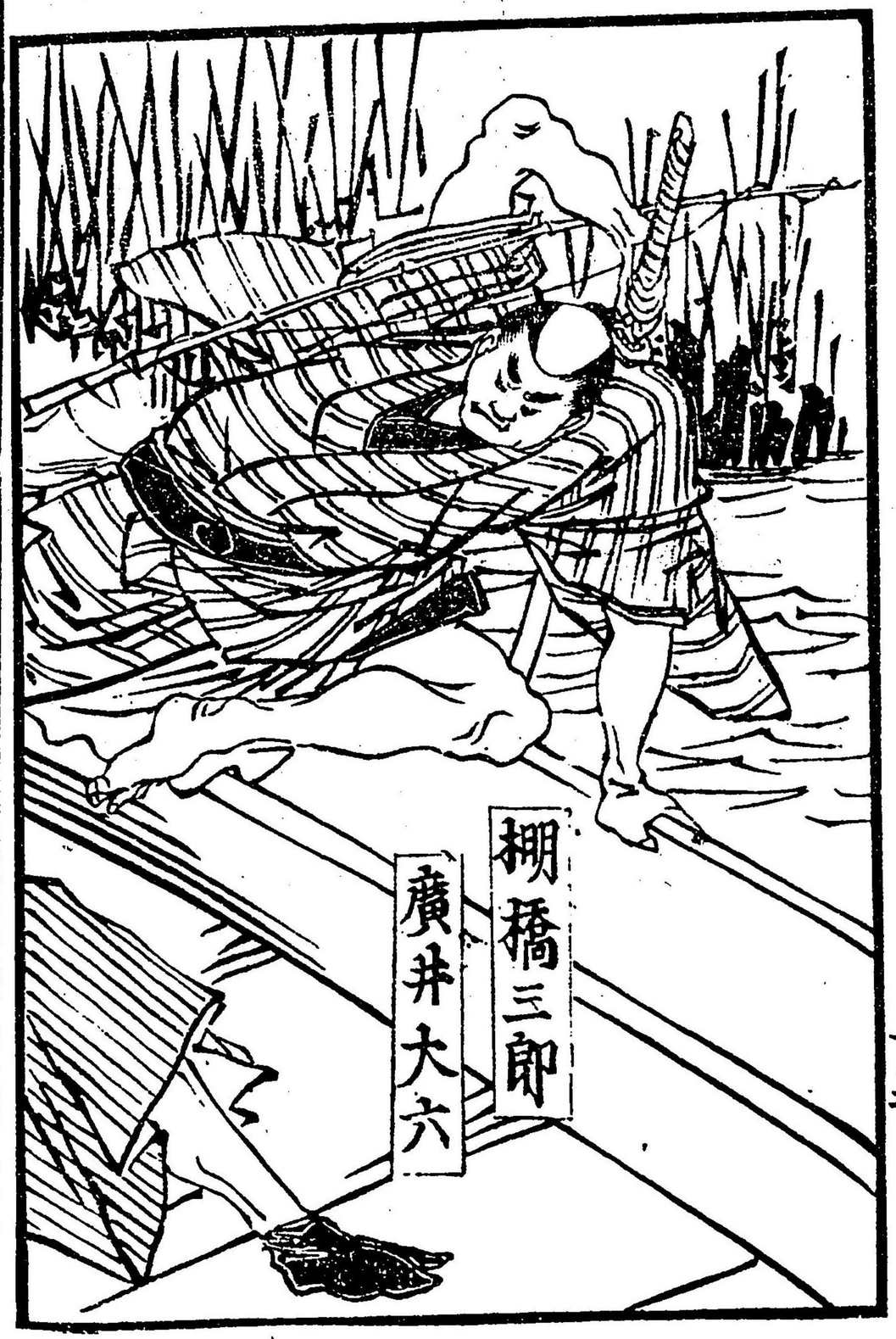
夫れ天地の造化。万物生類の恋しまるや。親は子に別るゝを第一とし。子は親に離るゝを最上とす。自然天命の尽るさへ。人間不慮の死別に於てあや。茲に憫然の物語は。今を去る廿五ヶ年。安政年度の事件なるゞ。大日本帝國南海道は土佐の國。高知の城主松平。土佐守の藩臣に。廣井大六といふ人あり。世々此國に仕へて徒士役を勤め。父を三助とめひ一子を熊太郎と号しゞ妻（甲藤氏）は一子を分娩せし後病気の為に死籍に入れば。幼子養育の為に後妻（葛目氏）を迎ひ入れとゝるゞ。熊太郎を實子の如く。寵

近頃土佐の聞書巻ノ一

編輯　長尾吉之助

夫れ天地の造化万物生類の恋しきや。親は子に別るゝを第一とし。子は親に離るゝを最上とす。自然天命の尽るさへ。人間不慮の死別ふかしとあり。茲に憫然の物語は。今を去る廿五ヶ年。安政年度の事件なるゞ。大日本帝國南海道の土佐の國。高知の城主松平。土佐守の藩臣に。廣井大六といふ人あり。世々此國に仕へて徒士役を勤め。父を三助とめし一子を熊太郎と号しゞ妻（甲藤氏）は一子を分娩せし後病気の為に死籍に入れば。幼子養育の為に後妻（葛月氏）を迎ひ入れとるゞ。熊太郎を實子の如く。寵

愛育すく撫育するとべ。熊太郎も成長に隨ひ其恩を深く思ひ。父母に從う事。一ッとして道に背くなく。まこと勤仕ふも怠慢なるとべ。父母はあるかぎ掌中の玉。柳しの花とも愛寵しこ。早年齢にもなりたるとべ。能き嫁迎えて初孫の顔を見るかゝ嬉しらんと。我往く老へ知るべとして。子の成長を祈りぬる親の慈悲こそ難有れ。偖も此。大六へ平常に水漁を好こ。勤仕の閑暇ある毎に。釣と角をて樂しこるゞ。今日をん安政元年乙卯歳。卜月二日の事なりしゞ。同州浦戸の濱に船を浮め。月愛めるに業に寒風も厭なぐ。其処よ彼処よと漕ぎ廻る。水掉の雫う露ゆうも。先へ消えぬる命とも。手操に下うす糸し子に長こ別をに成る身とも。神なくぬ身の白波と。分けく漁釣る冬の日も。早西山に傾けべ。船を浦戸に漕ぎ戻し竿よ笠竜よと撥に集め。早千上陸の時も時なるへ所の産神祭礼に同所の村民袖とつれ。綺綾めく衣装花やうに。神へ請での其賑ひ酔うめり舞うゆうり唄うゆうり。斬ゆへ燗酒蕎麦切り温飽或へ汁粉ふ麦饅頭。子に買う人へ恩愛に。耳こ土産と白蒸赤飯。語る咽より路上の雑沓。中押し分けて一人の武士。産神祭りの振舞酒に充分酔を造り髭顔へ祭礼の提灯より。明石うう須戸の浦手島よろめく足と


棚橋三郎
廣井大六

棚橋三郎
土佐の浦戸
廣井
大六
宮ちゃおじゃ

踏しめく。廻らぬ舌の雑言過言。途行く婦女子を追ひ廻し
自己づ辷りて轉げこる。人の仕業と無理難題。それど諸人
へ御家中と除けて通ると自嘲に上見ぬ鶴の傍若無人
果へ浦戸の濵邊に来こう。大六う船と見附け。ヤイ夫に
居る船頭。其様と其船ゆく。我言う所へ漕ぎ往くべし
否と申さば手へ見せんと威しの柄に手をかけて既に船へ乗
らんとす。町人農夫の身分なれば。忽然愕然所なれと業
うり此方も武家生まれ。憤せど最前より。往来人へ
無法の振舞剛え我船へ。不礼の振舞憎くき奴一聲
と震うて以後の為。懲らんものと思ひしづ我へ勤仕の身分
なれば。万一身に凶事あるなんべ。主家へ對して至極の不忠
殊更今日へ産神祭礼人躰撃つへ神慮の恐れと素うう
相人へ酔狂人高の知とたる一小輩。なんぞ雑に生の刀と用
ひんやと態と柔和に笑顔と作り。如何にそなたらお武家
望する所へ安なれど。素うう我へ船子にあらず聊浦べに
漁鈎して。家路へ急ぐ者なれば。折角の仰なんど貴慮の
侭ゆへ量らん難し。幸ひ上手に渡船も候へべ。夫なて望と達
し玉へと。立去らんとする袂と捕らへヤア爰か渦虫め。上手の渡
船へ雇うべ知ぬり。今更你に習うべきう。武士一言跡へへ
引うぬ。斯う望と掛けうれべ。否應なしに此船りうて。本意

と遂ずん武士立てずと。弱身へ附け込む尼病神。忽ち帯又
ひらめひし。船へ飄然と飛込めば。アヤて面倒と大六へお揮ふ白又と
其処へ抜け。此方へ潜りて水棹と取り。防ぐん物と俯向拍子大
六運や尽たりん。舷ゆて脇腹とさくうて其侭に深海へ
どつこと落ち入るとび得こうや應と拝こ撃。初度の負傷に二度
目深手。水練切者の大六。何角へ持つて耐堪べこ。物とも言
こべ浦戸水屑。朱に染めゆて潮面へ立田の河に夕陽の影と
彩る如くなり。畢竟相人の痴者の性名如何と尋ねるに同
藩中ゆて柳橋三郎とこる悪徒也。諸人へ破驚や宣呪く人殺し
と群集の中の大騒動兼て祭礼保護の為地頭ゆりの出役人

由と駈つて馳来り。三郎を縛ゆめ引飯るえと見る人心地也と
笑ふ人とそなりり。茲ゆ廣井大六の一子熊太郎へ生憎く其
日へ仁之村の役所へとそへ勤仕せしゆ。所隔たる事なれば此事柄
へ露ちれず。其夜へ何とう氣味悪く。臥房へ入ると眠も塞ず。
現然として枕邊見るべ。総身へ水滴と。鬢髪乱て顔色青醒
憤怒の眼光歯と食ひしめ。すつくと立こう鵜の人影此方と見てへ泣
ゲ如く。又訴ゆる有様へ。熊太郎へ何と起立ち。我身神気の虚とう
ゲ。抓理の類ひの籠ゆ。他人へ知らず熊太郎。畜類如きの訛
弄品ゆ成べこうへと瞳と定め。よく見るべへ不審や。彼の怪物我父
大六へ生写し。親の姿へ避易して。討留るゆ心後と暫時看豫とす
内ゆ。両戸を誘う風嵐の音ゆ驚き眼と覚べ是南柯の一夢ゆて

四頭を見るとて枕邊に立てる人幽の行燈より外あへ更に一物も無れば
尺管合点往かず。今こそ見へさせ五比へ我父上に相違なし心に思ふ
事めるべ。必らず夢に見るのちんで我親を思ふ人今宵に限
らん。殊に憤怒の御有様見るも中々痛ましく若や御身に出事
でもあらう。自由の身ならば神速駆付け事の安否を問さんの為
聖朝交代の済む迄は身低にたらんに勤士の身分と我家の方と
お守り。待つ程長き冬の夜も遠寺に告る曉の鐘東雲ふれる
鳥の声も。物思ふ身は忌々しく。庭に啼く立蓋雛も國家孝行
と聞く時は尚親の事ならじ。立ち居ちらする処へ我家の
来る。至急の文通偖はと心に緘を押切り。讀めば大六横死の事
納熊太郎は仰天なし。返事も得せずあつ取り刀我家をさし
て達駄天走り。帰つて見れば家内の悲傷母は我子の顔見るより。
ヤヨ熊太郎ら待兼しと互ひに顔を打詠め。語るも聞るも胸塞がり。
先立つ者は泣にて暫時は涙ひ沈しう。熊太郎は両拳を握りて
は伝家ならう三郎めは國君ならの捕縛とあるべ討つ事難し遺憾
是に不過と歯ぎしりなして大六横死の事拆を。
其筋へ哀訴なし形の如く葬式行ひ喪に閉籠る其内にも。
追福作善の外なりて或時は神牌に向ひ父上尊霊聞たまひ
不慮の事ゆえ無念の御最期さぞ恨くに思はらん御尤おいさ
なげへと父を討たて生き残る我身の程の悔しさは尚百倍の思ひぞ
や。我にも恨とこの栩橋三郎。天地を潜る術あるとも搜し出して父上
の恨と雪ぐべき置くべきぞ。忰兼の旨より上覧おもとを在まる姿

孝養ふるに只袖ぬらす計りなり。早年明て六月ふへ敵捕橋三郎へ藩籍を削られて國外へ追放さる行方不知と聞くのみならず廣井の家も没收せらるゝ宗家の籍に加入仕て憂き年月を暮る内公孫豊尚公の雇仕に勤め。養母をたゞ〳〵勤務の間ふへ戦と廻し捨て捨り。頻りに武術を練磨なる且行ひの正実なると豊尚公ふも感賞ありて熊太郎を更めて盤之助とぞ賜りなれば其君寵の重りしを衆人之を羨みあと盤之助ハ喜こび之兵管仇人を討んりつと肝膽砕く其折うち尋ぬる捕橋三郎ハ讃岐の國ハ象頭山某の院に奴僕と成つて勤めて居しが此頃ふへ合衆國へ趣くとう。反うにて。尚一層憂苦を増して國元を抜走んを事而已思ひなる

土佐の聞書巻ノ二

斯て廣井盤之助ハ仇人棚橋三郎の讃州象頭山に有り。合衆國へ洋航せんとの噂を聞より。現在仇家ハ隣國に安然として居るハ暫時の内も堪へがたし我身如さが一人無くとも君ふへ臣に尽しなべて孝と知り。なゞく其夜父上尊墓の前に慎怒の顔色今にまゞ眼の先に残りてわすれ間も早く仇人を討ち。仇羅の妄抵晴さ暫らく國を逃走し首尾よく本意を達しなば即時に帰國し國法に把せし罰ハ一分寸断。人殺裂の刑に逢う迄も。今の思ひに換がゝ鳴呼忠孝なれば孝なゞ。歎とし小松の重盛の其金言も我身の上実に浮世やと。身を悔るかあち

泣くさえぎる母へ寸の間も。家居と出発へ何一ツ。旅の調度へ整ひ
ぐく。発やせん角やと思う内。或日我家の表口に。女の手跡の認
めこる一封の折簡あるべ。拾ひ取つてよく見るべ。母の妹の其より。
我母への至急の飛文母に問へども。露知れべ。急ぎ開封し讀取れば
母公急病さし発り。已に危く候へべ。姉公即刻御入来と叔母ちろ
人の口述ちくるべ。母子共に大ひに驚ろき母へ殊更言葉もそぞろ。
何時来し手簡ぐ知らねども。定めて母や妹へ我身の遅参を恨
こそあらん。盤之助も跡より来る。我へ直様駕附人と取物も取敢ず
帯搦り上て一散に。母ちる方へ走り行く。跡見送つて盤之助へ
時こそ得こりと其隙に思こうぐ尽に旅装調のへ巨細母へ一書
を遺し我家と跡に出て往く。此時や安政六年。己未歳八十二

月四日の夜なり。是全く盤之助の失策にて叔母の偽書仕て母と出
抜き。旅の用意を整ひ済し立出しへ出なぐつくく心に思う様我
身不運にして仇人の為返り撃にも逢う事ろ。又へ仇人と追ち
為海路の風難山野の急病魚獣の餌ふる成るなくべ。再度養母
の尊顔を拝きる事へ難うるべし。今一度拝謁なし目出度発足為
すべしと祖母ちる家に走り往こ。何気なこ面持ゆて。祖母公御病
気如何ぞや。御見舞遅刻と言ひ込めへ母へ疾々走り出ヤ盤之
助う能くこそ来ると然し最前見こうし文へ誰ぐ為を業ぞ恨め
しや。我身来ると御老母へ平常に変られ御安養其方も
定めし立腹ぐん。はしあこ所業にて母も子も驚ろされて只し
さよと聞くより態と大ひに笑らひ何奴の業ろへ知れど。祖母責

身さへ安体なれば。之に過たる大慶なし。却て神ぐかくしとや。世の諺
言もあるなれば。寿齢八萬々歳。其祝義に美酒一献賜もらんやと
余所ながら。望むも母子の眼乞。祖母も叔母も立出て。有合者
ともうぐ。ふ頻逆巡る盃盞も。親族團妻奥底なく。月出度尽しの
笑ひ声。語で真八添ひとぞ。盤之助ぐ身に取りて。今日別まとへ
又何日り。巡り合うやと思う程。見飽ぬ母の顔形姿心で。綾る血の
涙明越を酒も。鉛の熱湯喰るう如き苦しさを。見せじとすれど自然
酌する手さへ震えて。覚へず溢を酒より。勝を濡すへ盤之助ぐ。
悲歎の涙ぞ道理なる。酒も談話も長酣ふいざや帰らん盤之助と。
母子諸共此家と出。二十余丁の道すぐ。早七分目も来りし頃。
盤之助八母に向ひ実ふ今夜我輩へ宿直の番に候所。今日の

仕置して代理と頼こ。安否ふ依て出務の約束。然る処に祖母公も
別条無之在せば。是より後所へ出勤仕し。最早我家も遠う
らず。母公送り来らせて。夫より往ても宜ると共八此畦道ぐ役所へ
近街。定て代理も首差伸て。待うと思へ心急こ。茲ふて御暇さま
ろへしと聞より母八あうるぐこ。動へ暫しも欠こ難し。何しに
母に気兼うあり。ぬしも急ひで出勤こ。代理の人へも呉々と。今
夜の礼も厚く述べ。翌日八疾ふも帰り来よ。斯らふ迎も此夜道
余り周障て畦路外し足や負傷こふ。後者も草鞋に成もとぞ
冥こ幸ひと。我の夜道も打忘と。脊長延こる壮男と子供の様
ふ思ひ取り。平日ふ増こる熱切も。虫ぐ知らこうう何とぞ。別まと
もこと其風清。ぐこうべも口安竜る。母の慈恩と夕の供人二ツに

廣井大六妻

廣井大六の
妻子まつの
の接ぶりを
ゆのて大い
る愁腸
ちょうぶ
廣井熊次郎

分る技道に漸やり扶を分ちるぞ。跡より返り母の影見えざる遥夜目遠目。思ふに大地にとうと伏し心亀し玉ひ母上よ我意に遺せし文面みて。担擁賢察玉まるべし。其を得ざるの父の仇討すべ家名の瑾とるなり。子わが我身の孝も辛ず母へ願ひて出立を乞幾回う思しうぞる。慈愛の かさ母公母へ我身の旅苦も思ひやらと。免や角未練な御心根も。尚んゆる不限且へまこと。御暇を賜る共彼是隙取事あるべ現在仇人へ隣國と聞くへ尚更捨置とず一且歎く奉るぞ。首尾能く本意を遂せしちべ即刻帰國し高恩を方分の一をも報ずべし。定めて小子出し跡へ朝夕の宮仕も誰勤むる者も無なるべ心細くも思すらん心らずお心強ゆして病の出ぬうり愛躰。家ゆ止るも旅へ出ずも。皆父上の為なれば。絆角へ貞操孝道祖母公初め叔母公前へも宜敷お傳へ玉まるべしと。今宵の色を彩ゆえん。ア我なぐ鉋きして。野辺の見る目も憐しや。

夜や明ちべ人や見んと。夫より道を東北に取。急ぐとすれど仕馴ぬ遠歩。山へ一歩より一歩より嶮く。雪へ一行より一行に積り。果へ股を埋むに至る。或へ石岩根に爪突き。或時へ深谷へ轉び。或時へ途に迷ひ。辛うじて蓑荷の里に着き爰ゆ一泊する折ふ。近村に人と盜と賊ありて。村吏の捜索中 彼の盤之助を見認るるの怪しの曲者おぐんなれと。垂三垂三に捕や虜る。あへ垂体なる狼藉ぞりと思へと寡へ衆に敵し難く。素より大事と抱ゆる身と。手向もせず縛につく。此時村吏権柄に其処なる

曲者新くなる上へ。罪悪不殘自状せよとの。厳重の糾問も。盤之助が身分迄へ御覚のなき事なれど。敵を狙う者なりとも。明白あへ申しがたく。我へ母の病気の為。金毘羅神へ祈禱せんと象頭山へ詣でる者。定て外に本人あるべんと。其処を明察有つて我寺と恩免玉まるべしと宣ふ言葉に奥歯分り。人違へとへ思へども。流石邉鄙閑僧村迄頭に変心致し難く。先其賊の出来る迄とえと役所に繋ぎ置くべく盤之助不幸ゆえ。発見するや不日まで。不慮の難に身を苗らも。彼の孔子の陽虎に似て。陳の道にて虜とる。其故事を思ひ出し。こる蓋世の聖人すら薄命なる其時へ虜とまでなり。天へ素へ交と討ち程。不幸の我身。加る難義も有べし是も母公孝とする。天罰あやまんまん。

これとも心に覚のなき事いろ〳〵晴れく時有へしと待等もく已翌三月。放免にへ逢て。ことと素ふり僅女の裏中たんべ彼是もる内貯財尽く。詮方なくとべ高岡なる清庵寺の住職れこ岩識とくる僧ゆ。此の知縁あるを以て爰にたりて未院なる北地村なる某王まの堂守となり果て。夜と昼く日と夜〳〵本尊に打向ひ南無某師佛〳〵と玉ひ我身の父へ人に討と我まく爰に窮迫も此困難へ世にいろ四苦四病の苦痛より幾層増なる悪となれば。廣大無辺の瑠璃光の我鬱憤と輝さを玉ひと。或る時へ香花を供し或時へ合掌し。堂前に転りて何日〳〵斯の如く捌搦の首を切らんや。佛殿を掃除して何日〳〵斯の如く。三郎と討〳〵眼らくの程を濯んやと。佛仕の間へ農見を集め。文業の道

と後げ。其余情ゆゑ口糊を補ひ。早其年も暮し果て新たに春へ迎へられで古を浪をの気も霄待わび。柳の髪も摘削らず。氷い温風に消ると歟と涙の水柱い解るふとすし空に弥生の時来り。野山に遊ぶ櫻狩の人影見るさへ五月塊て斯ちん述懐詠しる（花の朝月の夕へ殊更ふ右し昔を思ひ出さちり耳卯月ふも成ぬまべ。一声誘う郭公も帰るに不賀と告ゑとで。心の水意達す迄へと。袖へ干るに五月雨ふへ曽我兄弟の事と思ひ我得る時へ何日ぐやと地と焼く夏の旱魃に雨を待つ尚遠く。薄墨流を初雁と倶に我身る旅漂の客音信頼む故郷更定めて待俗王らんめ　父慈し母慈しと。そぐく歟の音竜馬ちん。此秋獨り我身の秋うとまく神ぬを時雨空神無月とぞちりにる

土佐の聞書巻ノ三

再説廣井盤之助へ他郷に流浪せる事。九端掛三年にして漸や故郷へ帰りるる。仇人捆搗三郎ひへいまぐ讃岐と伊豫の間ふへ居ると聞ちる。其年十二月故郷と立出で鎗術修行と表と欺ち一時我名も更さめて吉川岩藏ととて名乗けるに新て該地と捜索すれど仇人の在家知ちとべ岩蔵へ望と失ひ今般へ東國へ下り。其行方と尋わんれ然し天下と周遊仕るへへ虚無僧に成くへ名しと。夫ちり早速京都へ来り。僅少なる知己と以て同所諸司代在勤ける。板倉筑前守の藩臣なる。西村敬造の助力と以て普化宗の梵論字ととて成にる兼て世間と往来ふへ深編笠に面と隠し忍辱柔和の袈裟

を纏い口に尺八の竹笛を吹き。戒刀を腰に帯び。短銃を懐中に蔵し。四街八衢を奔走なし。河内の國堀溝といふる里に寓居して光陰を送る。折柄天下騒がしく諸藩の遊士蟻群をなし。尊王攘夷の論を唱へ。或いハ闇殺且ハ又貿易射利の商人迄も。漫りに輒つて梟首なし。或ハ何組某の隊と。黨を結び群をなし悪行恣侭にするハ。若其徒輩湊集なんと。幕府より之を制し。此普化宗の虚無僧も。周遊も禁じらるべき事を得ず。吉川岩蔵ハ。大阪へ来り還俗なし。兎や角漂泊有りしが。如何にしても三郎ハ。四国路に居るなるんと。夢の底に忘れざんば。又うや讃岐に下向なし。或ハ伊豫に赴きて。三島といふる所に到り。仇家の容子を伺ひしが。委細聞べ。先ず頃此地へ来りし三郎とのハ。全く山本長五郎といふる者にて。岩蔵の捜索する捌搦ありて。有らざる事。分明に聞く取りなるハ岩蔵ハ舌鼓なし。くるべしとハ。露ちぐ神なり。身を窶ひなが。仇くの居ねらと胡乱々と。一度なるす再度喪食忘れて捜せしハ。我なるの銃しさよ。かくる事とハ最初に知らばなること道に赴くぞ。捕てその難ふもあえず。去て佛仕の奴僕や虚無僧ふも成り果て迄武士の。斯迄凋と羅さじのれと。今更思へば其姿ハ我身なるも発狂病同然馬鹿気と事に奔走仕て。禹餅か光陰を費せしぞ。運なく有らば今頃ハ。首尾能く仇を討果し。故郷に帰り母公ふも。孝養尽し諸人ふも昔語で有るんに。

父の為に仕ふる困苦は。此上幾層増る共。物の屑とも思えねど。定めて他人三郎めは。我グ狙うと知らずして。安然として居るたるべし。悪業非道の三郎と。寸孝思う某と振替りたく。身の苦楽。何故天道逆を助け。順を懲しめ玉うらん。父尊昊も我身と見放し玉うう滅猿や。此上我身の運傾むく。若も三郎病死と仕ふく。祈らるれども某グ。犬扎でもこけるたるは。父の眼と晴まに人なし。一尺管祈れは天地の神明。且は亡父の冥助と以て。某の身も無病息災。他人棚橋三郎も。壮健にて有るふと或ひは祈り或ひは歎。身の墓なさと悔くるが何日まで斯てあるべきと。本意なく三島と出立なし。同州松山にと。到りける。爰は温泉場にて。殊に湯切のいちぢるく迎。諸方より来る数輩の病客。其、余病病になぞらへて。爰に遊ぶる人も多くて。或は沐浴の其間には。小歌淫猥瑠璃。滑稽落語。四方八方。話と仕るもあり。其外詩歌。発句。俳諧。一目弾う。黒白の石と意地との語合って。大戦争の討手。替へ先と弾う。抜舞に。互ひに敵に互り合ひ。切つ切らるとう。数手と奇石。征と思ひ追掛けて負と取りは。盤上にも。愁に眼の無印し也。彼方の席には石戦。は一舎と避し。木屑の押合ひ。言葉の約定待つ。なし互に捨る義理なう。桂馬の。鬢鼻褌。あひと。話らん。手には王将手飛車と。顔と角行の。斜行なう。横ゝ助言の。数策に。長うの思案の。雲隠語。屈多の。損好懲りもせで。爰も思案の。真中と

盤之助母
盤之助母
盤之助母

工夫を凝らせ都詰堅く固めり石田の門ひ貴手以ハ何之問屋程代呂物持て泥亀の間ゆも合手ハ御し賣り。三枚違ひと勝負三珠仕舞ハ腰を立脇迄崩ゝとりゝ詰方なく口につぶやく駒言も果ハ投ろり投らゝて昇下を將拱の遊び あゝとバ。按摩手按腰貧本屋紙お煙草に茶菓子賣本堂再建お手傳鼻の下ハ喰ゝ殿働化来るあり出るあり大繁昌爰に吉川岩造も。斯ちん泉の集る所。若や仇家の噂もあるゝニツハ又身体補養。暫らく此所に足を留め。湯治と為さんと旅宿と求めあゝとお意と配る内。ある日岩造ハ湯中。盗賊の業ふや有ちん着換衣類僅皮の路金も。奪ひ去らゝてありゝゝバ。此所に居るゝも計策なく。残るあゝとゝ治代なし。此松山を発足なし。安藝の國ハ廣島に赴ゝて。其藩中に石と得さる。捨術師範の島末源太。是なる方と尋ね往き身の薄命と歎きゝゝとバ。武士ハ互ひの情と以て是ハ些少の至りなゝとゞ。道にて草鞋なゝと求め玉へ。茅舎なれとも だゝくハ寛然と滞留なし。遠旅の労ゝも補ひて其うへ発足なし玉へと。心隔てぬ懇切に。岩造ハ感謝なし。斯先生の御芳志と背き申すにわゝれども。兼て大望ある身なれバ。寸の間なりとも駈歩行仇人の有家と捜索せん お名残惜しくハ候らへども。是ゝお暇玉なるべし。音尾能本意と達せし上。三度恩謝に参上せんと恵この金子押

戴き懐中なして此家を辞し。東をさして志さん道の費へに島末ゐて貫ひし金子も遣ひ尽し今八立寄る知已もなし。求餅ゐねたる雪の鳥啼くゐも泣けぬ身の詰り進退茲に谷かゐて股割拂き狙果んと幾回覚悟ハさゆくゑとど。身の大望に心引ゐゑ流石命の悲しさハ。武とも魄とも歩捨て。人の餘ゑる食と乞ひ。扇に受る合力に鍾銭一文と得るにさへ三軒五軒も廻らすバ。掌に入り難き事思へバ。ゆしてや人間手足もある身。佛人の知ゑぬも断りなりとゑ。ゑ宵め野ゐ卧して露置く艸ゲ夜の衾山に寝てハ凸凹ゐる岩根の角を枕とゑし。梟の声と颯々ゐる。松風のくと幾夜の伽霜と食ひ露と飲ゑ辛う。

じて摂津の國の。須ヱノの浦辺へ来ハゐゑバ。今日八生憎朝ゐりして一咽の糧も通ゑして。鋤さへ夜に入りて風雨の身体浸しゐゑこバ流石勇気の武士も路傍に倒ゑ死に附くゐるゐ。夜八明くゐゑと身体ゐこゐ春蟲めく。のくの其折柄。道往く一個の小商人岩造の姿を見て。瞑然ゐや思ひゐん腰なる握飯取り出し。當百銭迄之に添へて。ゐ。へし代に過去ゐ岩造八其人の。行く後ゐ影伏し拜ゑ飯と銭とゑ幾度ゐ押し戴くゐ。ゐく天我と誓五ゐバ渇死救助の恩人ゐり。是吉左右の前象ゐゐんと貰ひし飯と歯に噛む。味八咽飛ぶ思ひゐて。全く空腸と補ゐへバ。身神共に壮健に我に帰りし嬉しさに。速足出しておし

輝や浪速津さして急ぎ来る。岩造少し天運の開く時あや来りけん。其頃幕府徳川家に其名も秀でし勝先生（初へ麟太郎後に安房守に任じ今の名に安房と号に）幕府軍艦奉行として。此大阪に滞在する為て先生の義気有ると聞及びてありしとバ門だくろ政本龍馬。高松太郎の両士に附いて。我身薄命委細巨細赤心明して哀訴ちに。勝氏遂一聞取りくまん。岩造召せの指揮に随ひ前ちろ両士の尾跡に附ひて。心ろ〳〵も先生の月通りにこそ出にろ。畢竟えより勝先生如何ちる仁恵施ころく。夫へ編を次で見ろび

明治十年十月十八日活版印刷出板　定価五十銭

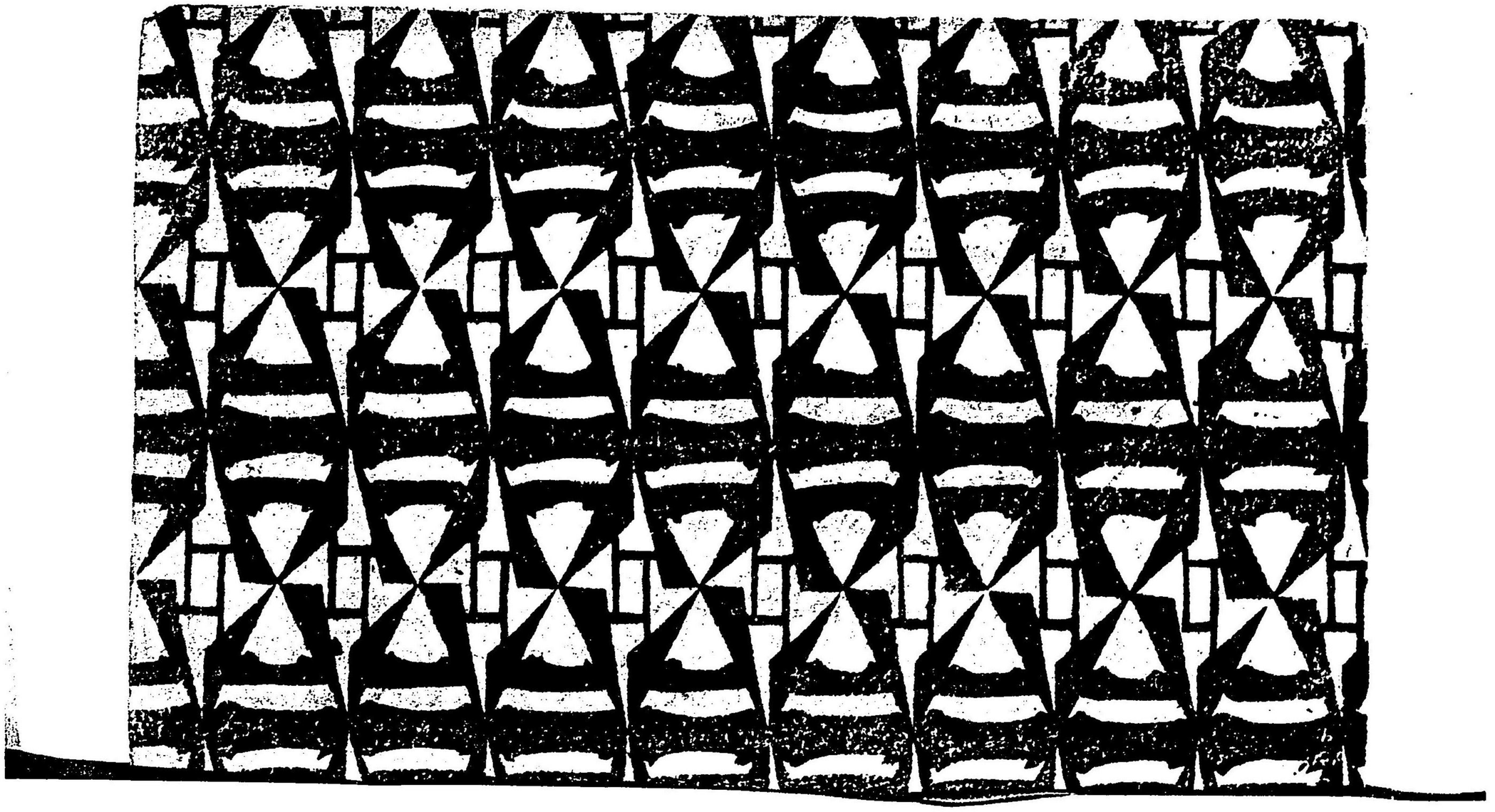
大阪府平民
大阪府大和河内摂津三国士族
徳島人　長尾幸助
大阪府平民
大阪府第一大区小区
平野町八十四番地
著述者　石川雅望

輝や浪速津さして急ぎく来る。岩造少し天運の開く時
きや来りけん。其頃幕府徳川家に其名も秀でし
勝先生（初へ麟太郎後に安房守に任じ今の名へ安房
と号ス）幕府軍艦奉行として。此大阪に滞在する為
て先生の義気有ると聞及びてありしかば門人坂
本龍馬。高松太郎の両士に附して。我身薄命委細
巨細赤心明して哀訴ありし。勝氏遂一聞取りくまん。
岩造召せの指揮に随ひ前ちる両士の尾跡に附
ひて。心ゝ〳〵も先生の。月通りにこそ出にける。畢竟
えより勝先生如何なる仁恵施こそ。夫へ編を次で見るべ

明治十年十月十六日印刷出板　同年十月廿五日発行

大阪府平民
大阪府第二大区三小区
大和町弟十番地
編輯人　長尾[illegible]

大阪府平民
大阪府第一大区九小区
平野町弟三十四番地
発行人　石川[illegible]



特42
848

205251−001−9

特42−848

近頃土佐の聞書

長尾　吉之助／編

M11

EDV−0306